

Title	専攻科英語プレゼンテーションコンテスト実施報告と今後の展望
Author(s)	中谷, 敬子
Editor(s)	
Citation	大阪府立工業高等専門学校研究紀要, 2009, 43, p.57-62
Issue Date	2009-12-28
URL	http://hdl.handle.net/10466/13650
Rights	

専攻科英語プレゼンテーションコンテスト実施報告と 今後の展望

中谷敬子*

A Report on the English Presentation Contest for Advanced Course Students

Keiko NAKATANI*

ABSTRACT

大阪府立工業高等専門学校では、平成18年度の専攻科設立時から、英語によるコミュニケーション能力の強化を教育内容の特色のひとつとして位置づけている。その教育目標を達成するため、TOEICで400点以上が単位修得要件とするだけでなく、同時に、コミュニケーション英語Ⅱ(2年生通年必修科目)の授業一環として、2年生秋の文化祭(高専祭)で、英語による研究発表会「専攻科英語プレゼンテーションコンテスト」を全員参加で実施している。本稿では、平成21年度で第4回を迎える専攻科英語プレゼンテーションコンテスト準備の過程での学生自身の自主的な創意工夫の努力とその成長、および、毎年の授業での取り組みとその改善過程について報告し、コンテスト会場アンケート等の分析から、その効果と今後の課題について分析・報告する。

Key Words: English education, English presentation, speech contest

1. はじめに

大阪府立工業高等専門学校では、平成18年度の専攻科設立時から、英語によるコミュニケーション能力の強化を教育内容の特色のひとつとして位置づけている。その教育目標を達成するため、TOEICで400点以上が単位修得要件とするだけでなく、コミュニケーション英語Ⅱ(2年生通年必修科目)の授業一環として、同時に、2年生秋の文化祭(高専祭)で、英語による研究発表会「専攻科英語プレゼンテーションコンテスト」を全員参加で実施している。本稿では、平成21年度で第4回を迎える専攻科英語プレゼンテーションコンテスト準備の過程での学生自身の自主的な創意工夫の努力とその成長、および、毎年の授業での取り組みとその改善過程について報告し、コンテスト会場アンケート等の分析から、その効果と今後の課題について分析・報告する。

2. 大阪府立高専専攻科の特色

大阪府立工業高等専門学校は、平成18年度に専攻科を

設置した。本校専攻科の教育内容の特色は、本校専攻科長 有末による私信(“府立高専専攻科の特色”(2008))によれば、以下のようにまとめられる。

- (1) 総合工学システム専攻(コース制)
- (2) 総合化をめざす実験実習
- (3) 長期インターンシップ
- (4) 工学特別研究と学会発表
- (5) 英語能力
- (6) プレゼンテーション能力
- (7) 学士の学位取得
- (8) JABEEによる高い評価

この中で、項目(5)(6)にあたる特色が、本稿で紹介する実践例に関連するものである。英語の能力に関してはコミュニケーション英語(1, 2年生必修)においてTOEICで400点以上が単位修得要件としている。また、2年生秋の文化祭(高専祭)で、英語による研究発表会「専攻科英語プレゼンテーションコンテスト」を全員参加で実施している。これは、平成19年度から学校行事として実施されている。

3. 大阪府立高専専攻科英語教育の概要

本校の専攻科修了要件にはTOEICスコア400点以上なる項目が含まれている。このため、学生は、授業で求められる学習以外でも、自主的にTOEIC対策を講じ、年に2回のTOEICテストの受験が必要となる。

2009年8月20日受理

* 総合工学システム学科 システムデザインコース

(Dept. of Industrial Systems Engineering: System Design Course)

学生に対するTOEIC対策の支援策として、平成18(2006)年度より、TOEIC IPテスト(IP:Institutional Program;以下 IPテスト)を学内で実施している。IPテストは、団体特別受験制度とは、実施する団体の都合に合わせて随時TOEICテストを実施できる制度である。テスト結果も、公開テストと比較して結果が早く入手できるため、学生のモチベーションの維持にも役立つようである。その上、テスト結果の有効性は通常公開テストと同等であると判断される。

この団体特別受験制度に登録するための登録料は、毎年、後援会から提供されている。学内事務局と監督は、専攻科英語担当教員のボランティアに任されており、事務局を著者が、試験監督を専攻科1年のコミュニケーション英語Ⅰを担当している前田が担当している。

TOEIC IPテストの受験人数は、年々増加傾向にあり、最近では、年間10回程度の実施で、毎回平均30名程度が参加している。スコアは平均360点~400点程度で、毎回数名の600点以上取得者がおり、最高点も年々向上している(最高点:680(平成18(2006)年度)、720(平成19(2007)年度)、820点(平成20(2008)年度))。

専攻科における英語授業科目は、各学年で必修科目として用意されており、いずれの授業も、日本人教員と外国人英語教員で教育に当たっている。表1に示すように、各学年において、単位修得のために達成すべきTOEICスコアが定められている。著者は、専攻科2年のコミュニケーション英語Ⅱを担当している。この科目では、授業の一環として、秋の文化祭(高専祭)での英語プレゼンテーションコンテストを実施しており、これは、学校行事として認められている。

表1 専攻科コミュニケーション英語のTOEICに関する部分の単位取得要件(平成21(2009)年度)

専攻科1年 コミュニケーション英語Ⅰ(通年必修)	TOEIC SCORE 350点
専攻科2年 コミュニケーション英語Ⅱ(通年必修)	TOEIC SCORE 400点

4. 英語プレゼンテーションコンテスト実践の変遷

4.1 コンテストのスタイルの変遷 専攻科英語プレゼンテーションコンテストは、平成18年度の専攻科設立と同時に開催され、今年で4回目になる。一貫して続けているのは、英語で概要集の作成と英語講演であるが、その発表スタイルやテーマは毎年の反省を踏まえて、試行錯誤を重ねている。発表スタイルは、全員が一人ずつ発表するスタイル、グループ発表スタイル、そして、ポスターセッションとプレゼンテーションの両方を実施す

るスタイル、プレゼンテーションだけをやるスタイルなどである。テーマについても、初年度は特別研究テーマそのものを扱ったが、来場者が年々増えるのを受けて、最近では、サイエンステーマのトピックスを分かりやすく伝える方向へシフトしている。ここでは、それらについて、年度を追って、まとめてみたい。

第1回 平成18(2006)年度 初回の発表形態は、学生1名ずつによるショートプレゼンテーション(3分間の口頭発表+2分間の質疑応答)とポスター発表であった。概要集も作成し、一人当たりA4版で半ページの発表要旨を作成した。発表内容も特別研究の内容であり、専門性の濃い内容となっていた。このため、会場アンケートでは、

- ・ プレゼンテーションか、ポスターかの方に集中する方がよかった。
- ・ 発表内容を特別研究にすると、内容理解と質問、および、評価するには時間が短すぎます。

といった意見が出た。

もちろん、初回から高く評価する声も多く、これらを力に、今日まで継続してきたといえる。

- ・ 学生は良くがんばっていました。普通の大学の学部生(専攻科2年生は、大学学部3年生にあたる)よりも立派であると思います。
- ・ ぜひ、来年もやってください。
- ・ Excellent!! But Teacher Load is too High!!

初年度は、初めての試みで、企画側も学生側も力が入った力作となった。一定の成果は得たし、この時点で、大学に引けを取らないというコメントを得ることができた。

改善点としては、以下が挙げられた。

発表内容、質疑の内容、ともに、専門的なものに偏ってしまい、当該分野を専門としない者や、保護者を含む一般聴衆、学生には内容を理解するのが難しかった。また、3分間のショートスピーチと40分のポスターセッションでは、内容を十分に説明・理解してもらうには、学生側にも聴講者側にも時間不足となった。

かなり高いレベルの多くのことを要求したが、学生はそれに精一杯応える努力をしていた。パワーポイント、概要集、さらに、ポスターと作るべきものだけでも多くあったため、学生の時間外作業が多くなっていた。発表内容が研究テーマであったために、必然、学生は指導教官の指導を仰ぎ、多くの先生方がプレゼンテーションコンテストの準備のための英語指導に当たってくださった。上述のアンケート最後のコメントは、その点への苦言であると思われる。

第2回 平成19(2007)年度 前回のアンケート結果や、

学内教員の方々からのコメントをフィードバックして、ポスターセッションをせずに、プレゼンテーションのみの構成に変更した。発表形態は、学生1名ずつによるプレゼンテーション（7分間の口頭発表+3分間の質疑応答）で、発表内容は、特別研究の内容をできるだけわかりやすく心がけた。発表人数は、14名であった。配布資料は、概要集（A4版 半ページ、研究内容要旨）であった。

総括としては、ポスターセッションを止めたことで、発表時間も長く取れたし、質疑の時間も長く取れ、かつ、学生からの質問も多く出た。これは、実は、前回、学生からの質問があまり出なかったことから、質問回数を成績評価に反映させるといったためであり、複雑な心境であった。さらに、質疑応答で積極的に質問しようという心積もりで参加して下さった教員から、「学生ばかりが質問していて、内輪で盛り上がっている印象を受けた」とのコメントを頂き、痛いところを指摘され、来年度への改善項目の筆頭項目のひとつと心した。

ただ、第2回の実践で感動したことは、学生が非常に積極的に取り組んだということである。これは、専攻科1年生の時に、第1回を聴講しており、「やるのが当たり前」という気持ちであったことと、自主性を重んじる指導を心がけたことによるものと思われる。学生側から、概要集の表紙の絵を提供してくれると申し出があり、これは、その後も続いている。この年の概要集表紙は、クラス14名全員の似顔絵であり、懐かしい思い出にもなっている。

第3回 平成20(2008)年度 大きな変更を複数行なった。発表形態を一人ずつではなく、複数の学生からなるグループ発表の形態とした。概要集もA4版1枚のポスター形式とした。発表内容も、研究内容よりも、研究分野に興味を持ってもらえるようなトピックスをメインとし、最後に研究内容についても触れるという重み付けに変更した。これが、一番大きな変更で、かつ、効果的なものであったと感じている。

グループ発表にしたのは、クラスの人数が、18名に増えたこと、発表時間をできるだけ長く取りたいと考えたことによるものである（7分発表、3分質疑）。また、聴講者も年々増加し、学内教員、学生だけでなく、一般聴講者の割合が高くなってきたため、概要集も、思い切って、1グループあたり、A4版1枚として、形式を図表を多用したポスター形式が望ましいと規定した。また、質疑対策は、授業時間中に発表練習の際に、質疑応答練習の時間を多く取り、質問する側も応える側も、当日でもしたければ質問できるだけの練習を積んだ。結果として、学生からの質問も、適切な量となり、会場から、および、審査員からの質問にも応える機会を得た。

研究テーマ自身でなく、そのテーマの日常の中での位置づけや面白さに重点を置き、かつ、発表グループを専

門ごとに固めなかったことで、異分野の視点が自然に入り、説明が分かりやすくなる効果が得られた。

この第3回の総括については、5.2節に譲るが、アンケート結果からも、幅広い聴講者からの賛同と評価を得た手ごたえを感じた。

4.2 授業準備指導の変遷 開始当初は、授業内容にも多くの学習項目を盛り込んでいたため、プレゼンテーションコンテストの準備は後期に入ってからか、時間外に実施していた。平成21(2009)年度は、これを改め、プレゼンテーションコンテストの開催は、後期11月であるが、授業では、前期のうちからプレゼンテーションのための準備を少しずつ行なうこととした。日本人教師と外国人英語教師（Temporary Native English Teacher; T-NET）の担当も含めた英語プレゼンテーションコンテストの準備スケジュールを表2に示す。授業は、日本人教師担当で1限、T-NET担当で1限と、授業の担当が、原則的には明確に分かれている。

日本人教員の担当する前期授業では、TOEIC対策をメインとしながらも、6月からは毎授業において、繰り返しのクラスメートの前でのshow&tellスピーチなどをさせて、彼らの英語での発表への積極的な姿勢を育てるための機会を与えている（図1、2参照）。同時に、学会発表として必要な振る舞い、言い回し等も指導する。

教材研究の中で意外に面白かったのが、審査員体験である。発表するクラスメートをチェック項目が記載してある審査票を使って審査するものである。チェック項目を理解させるのが目的であったが、単にチェック項目を

表2 コンテスト準備演習の概要

前 期	
日本人教師	英語プレゼンテーション対策
	・グループワーク（模擬発表準備体験）
	・審査員体験
	・Show&tell スピーチ
外国人英語教師 (T-NET)	日常会話を中心とした会話練習
後 期	
日本人教師、外国人英語教師 (T-NET) とも	添削指導と実際のプレゼンテーション対策
	・概要集原稿添削指導
	・パワーポイント添削指導
	・口頭発表原稿添削指導
	・質疑応答練習
	・発表練習
	・発表審査とその分析フィードバック

示して指導した年度よりも、雰囲気も明るく、かつ、理解度も高かった。

・T-NET 主担当の前期授業では、とにかく会話の時間を多く取り、本校専攻科のみならず、日本人学生全般に特有の照れや気後れの癖を拭い去るような授業を展開している。T-NET は、TOEIC 対策のような授業は行なわない。

後期は、学生の時間外の発表準備時間も増えてくる。概要集原稿、発表原稿、発表パワーポイント作成がレポート課題として課され、両教員から返却された添削を元にさらなるバージョンアップを目指す。

5. 英語プレゼンテーションコンテスト実施(平成20(2008)年度)

5.1 概要 約200名が収容できる本校大ホールで、土曜日に実施される。平成20年度の場合はグループ発表であったため、講演時間は発表7分、質疑応答3分とし、グループごとに関連する研究分野の身近なトピックスを紹介することとした。常に楽しむ気持ちを大切にしたいことと、学生の自主的な工夫や申し出を歓迎しているため、一昨年から概要集の表紙は学生達で作成してくれている。余談であるが、この表紙が学年のカラーが出ていて面白い。

審査員は、専攻科長をはじめとする計9名(英語科教員1名、T-NET1名、専門科目担当教員7名)で行う。司会は、コミュニケーション英語Ⅱを担当し、プレゼンテーション指導に当たっている教員が行なう。

「ベストプレゼンテーション賞」表彰は、審査員採点に加えて、会場からの投票も含めた評価を行なう。非公式には「会場賞」も賞している。

5.2 実践の報告、考察・評価

5.2.1 専攻科2年生自身への効果 英語力、プレゼンテーション力の向上等だけでなく、在校生最高学年としてのプライドが見え隠れしながらの悪戦苦闘の中で、確実に彼らの英語への姿勢が変わっていくのが見て取れる。これが、一番の成果である。

また、発表内容を広く一般の人にも理解できるように工夫するよう指導したところ、学会発表ではみられないような、さまざまな独創的な創意工夫が見られた。とくに、最初の「掴み」の部分で、テーマに親しみを持ってもらうよう工夫している例が多く見られ、ロボットをテーマにした発表での「つかみ」のスライド(図4参照)、酸性雨で腐食している水戸黄門を登場させたスライド(図5参照)、また、本論に入って、専門的とアレルギーをもたれそうなどころでも、図表とアニメーションを活用して、分かりやすさと親しみを感じられるように工夫したスラ

イド(図6参照)など、自主的に動き始めた学生のパワーに敬服した。コンテストが終了した後の記念撮影では、ほっとした表情のノビノビとした学生の姿がおなじみの光景となっている(図7参照)。平成20(2008)年度の学生からの寄せ書き Thank you カードが T-NET に手渡され、学生も楽しんでくれたことを再認識した。

5.2.2 参加者(聴講者)の反応 コンテスト聴講者の会場アンケートから抜粋する。学生自身の努力が与えたインパクトは大きい。

在校生等への効果

- 来年発表する立場だと思つと緊張する。
- 専攻科を希望しています。2年後実際になると思つと大変そうです。
- 初めて英語での発表を聞いて難しいと思つた。
- 専攻科でこのレベルの発表はすごいと思つた。

学生以外からの反応

- 非常にすばらしい企画でした。講演した学生に心から拍手を贈りたいです。
- これから必要になってくるであろう英語でのプレゼンテーションの練習になるので良い企画だと思つた。
- 緊張感があつて、とてもいい企画だと思つました。
- 21世紀の日本人はビジネスで英語が必須です。本校の試みは良い教育です。

5.2.3 企画者への改善に対するコメント 会場アンケートには、審査員として協力して下さつた教員をはじめとする学内関係者の手によるものも含まれている。このアンケートのうち改善点について言及されているものを以下にリストアップする。これらを分析することで、コンテスト運営側の課題と改善点を見出すことができる。

- You should practice English pronunciations much more harder. Audience couldn't catch your points if you speak such broken ways.
- 文化祭的な要素と、技術的なプレゼン内容に格差があると思つました。
- 一生懸命の人と適当な人の差が大きい(英語について)。
- 質問する側も、発表以外の知識が必要なものやその場で考えて答えなければならぬ、難しい質問はさけた方がいい。
- デモンストレーションを発表に含む場合は、ビデオや動画での発表にするなどの指導が必要。

コンテストは最近ではグループ発表で行なわれている。学生の自主的な創意工夫を積極的に支援する言葉かけを多くしているせいか、教員では思いつかないような発表

形態（最終的には実施に至らなかったが、漫才のような「ぼけ」と「つつこみ」の形態をとることにより、聴講者が感じるであろう不明な点を、発表者自身が問いかけるような質疑形式で進められる発表）なども飛び出す。著者はできるかぎり、型にはめず、彼らの受け入れているため、各グループの発表の持つ雰囲気には差が生じている。この点の指摘がなされているので、かれらの「楽しみながら取り組む」自主性を伸ばしながらどのように指導していくべきかが今後の検討課題のひとつである。

また、指摘にある、事前に授業時間外に発表時の調光設定等もふくめて複数回、発表会場である人ホールで練習したデモンストレーションがうまく行かなかった点は、危機管理指導をしていなかった著者の深く反省すべき点だと捉えている。楽しい成果発表の場であることが一番大切なことであり、動画や、アニメーション、および、その場で行なうデモンストレーションに対しては、もしもの場合に備えた危機管理指導を徹底することを肝に銘じている。

5.2.4 実践例紹介時の議論 この英語プレゼンテーションコンテストの実践について、多くの自研究室の専攻科生に国際会議での発表の機会を提供して実践的教育をしている杉浦とともに、平成21(2009)年5月19日(火)に国立東京工業高等専門学校(以下、東京高専)、平成21年度 SPHERE TOKYO コロキウム¹⁾「世界英語事情及び各高専の実践的取組プログラム」において招待講演を行なった。

東京高専は、文部科学省の平成20年度『質の高い大学教育推進プログラム』において、『国際通用力のある若き実践的エンジニア育成』のテーマで採択をされており、今回の講演会もその一環で行なわれたものである。

「大阪府立工業高等専門学校実践例 専攻科英語プレゼンテーションコンテストの実践と教育効果」と題して具体例を交えながら紹介をした。コロキウム後の意見交換会において、一般教科英語教員で、ご自身もコロキウムで「韓国の英語事情」と題した講演をなさった相澤俊行教授は、専門科目教員と一般科目の英語科目担当教員の連携と協力の重要性を強調された。また、コンテストを企画・運営する者として、学内教員はもとより、学生・保護者へのコンテストの周知と理解を得るための努力が大切とのコメントを頂いた。今回、紀要に、専攻科英語プレゼンテーションコンテストの実践報告をと決心した理由のひとつである。

6. 今後の展望と課題

一番の課題は、企画する側の意義付けと、別の視点からの意義付けとのギャップをいかにして埋めていくかである。

ある。著者は、英語プレゼンテーションコンテストを、あくまでも「教育の場」として捉えている。すなわち、積極的な挑戦による失敗は失敗ではないという認識である。とはいうものの、教育効果に重点をおきすぎるあまり、また、準備期間の短さからくる危機管理不足から、本企画には、まだまだ改善の余地が残されている。学校行事であり、文化祭において受験生や保護者、近隣企業を含む外部からの多数の聴講者が見る成果物としての視点からのコメントを積極的に取り入れながら、なお、今後も、学生が自分の力を勇気を持って試す場として提供し続けるのが望ましい。そして同時に、学生が、自主的に楽しんで取り組めるような内容にしていくように改善を重ねることが必要である。

いずれにしても、専攻科英語プレゼンテーションは、英語を道具として自分考えを伝えるためのスキルを身につけるための総合的な学習の場として、非常に有効であると考えている。また、在校生をはじめとする聴講者への英語に対する意識の向上に役立っている。今後も、関係各位の協力により、改善し、より一層効果的な教育機会に発展させていくことが期待される。

最後に、英語プレゼンテーションコンテストの発表者としてだけでなく、企画にまで積極的に取り組んでくれた(取り組んでいる)専攻科2年生諸氏に敬意を表する。

参考文献

- 1) 国立東京工業高等専門学校, “SPHERE TOKYO 文部科学省 質の高い大学教育推進プログラム”, (<http://spheretokyo.jp/index.html>) (2009年10月現在).

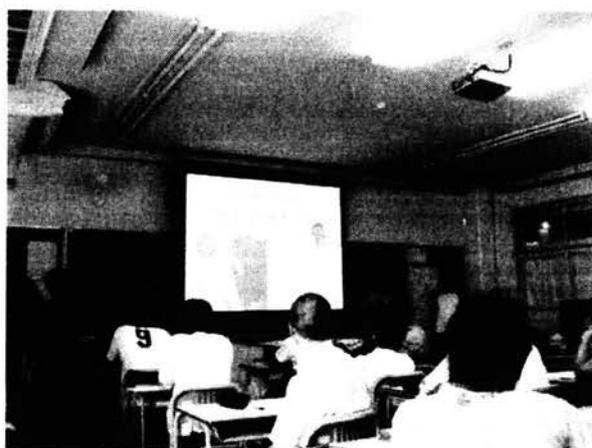


図1 授業風景(英語プレゼンテーション)

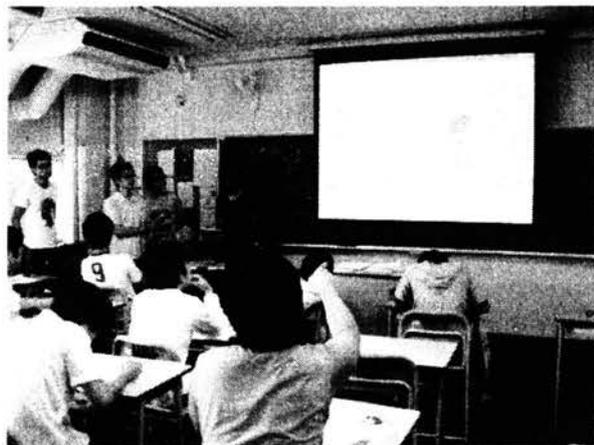


図2 授業風景 (英語ディスカッション)

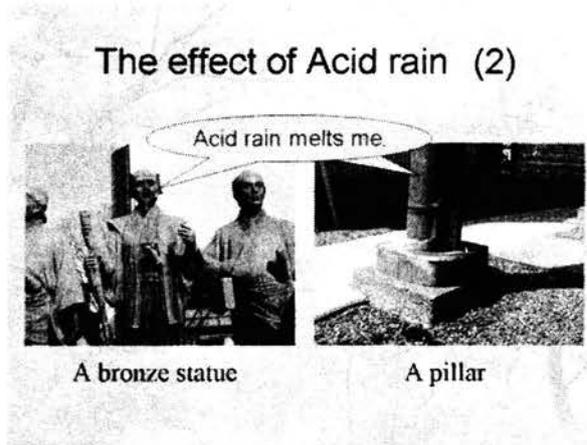


図5 学生作成スライド例(酸性雨問題の導入部分)

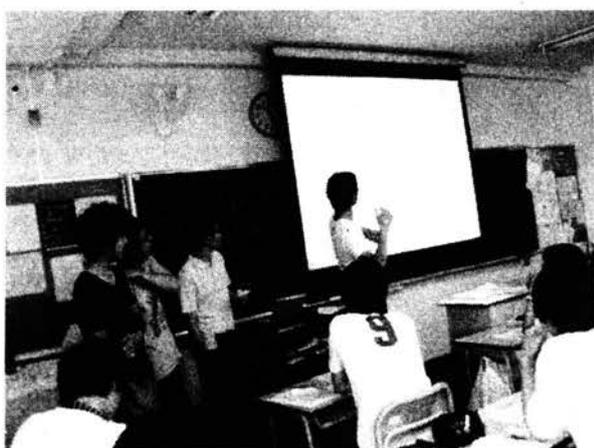


図3 授業風景 (英語ディスカッション)

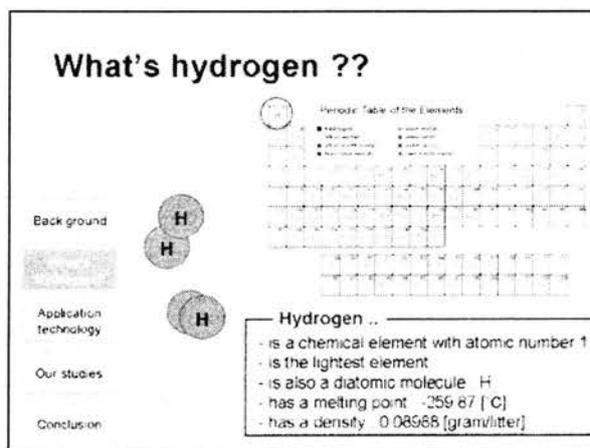


図6 学生作成スライド例(燃料電池の導入部分)



図4 学生作成スライド例(ロボットテーマ導入部分)



図7 英語プレゼンテーションコンテスト2008 終了後の記念写真